

伊予路しゃもを改良した交雑鶏の開発

愛媛県養鶏試験場 主任研究員 今井士郎

1 研究のねらい

当場では昭和63年に、消費者の鶏肉に対する高級化志向に対応するため高品質肉用鶏「伊予路しゃも」を開発したが、伊予路しゃもは肉質（食味）は良いものの、飼育期間が長く、生産者の経済的負担が大きいことから、優れた食味を維持しつつ発育性の高い経済的な肉用鶏を作出する。

加えて、今回作出した新しい肉用交雑鶏については、身近な県内産農産物であることをPRし、耕種農家などにも複合経営の一作目として普及できる方法を検討したい。

2 試験方法

JAS規格の地鶏に適合する交配（伊予路しゃもの雌に白色プリマスロックの雄の各系統を交配する）試験を実施し、交雑鶏の発育性等を検討する。

表1 試験区分

区分	交配	飼料、給与	区分	羽数	期間
1	WR13系統	ブロイラー前期用飼料	21日まで		
2	WR14系統	" 後期用飼料	22～84日	各区	13週齢
3	WR19系統	" 仕上げ飼料	85～91日	100	
4	WR19系統				

1) 調査項目

- (1) 発育性調査：育成率、出荷体重、飼料要求率
- (2) 解体調査：と体重、正肉重量、可食内臓重量、腹腔内脂肪重量
- (3) 食味アンケート

2) 飼養管理

- (1) 0～3週齢は立体育すう器で飼養し、以降は坪当たり20羽の平飼いとする。
- (2) 衛生管理は、当場の常法とする。

3 成果の概要

1) 発育性調査

育成率は、各区とも100%と良好な成績を示した。

出荷体重は14系統を交配した2区が最も高い成績を示し、飼料要求率では13系統を組み合わせた1区が良好な値を示した。(表2)

表2 発育結果

区分	育成率	出荷体重	飼料要求率
1区	100.0	2,689 g	2.81
2区	100.0	2,857 g	3.07
3区	100.0	2,796 g	2.90
4区	100.0	2,780 g	3.22

表3 解体調査結果

区分	性別	平均体重	平均と体重	と体歩留	もも肉重量	むね肉重量	腹腔内脂肪量	正肉歩留	脂肪割合
1区		3,420(g)	3,093(g)	90.4(%)	666(g)	416(g)	96(g)	34.5(%)	3.1(%)
		2,307	2,127	92.2	468	270	67	34.7	3.1
2区		3,447	3,127	90.7	685	432	94	35.7	3.0
		2,353	2,127	90.4	463	298	81	35.8	3.8
3区		3,513	3,173	90.3	713	401	72	35.2	2.3
		2,327	2,147	92.3	468	295	87	35.5	4.0
4区		3,347	2,993	89.4	645	424	105	35.7	3.5
		2,307	2,100	91.0	450	325	72	36.9	3.4

2) 解体調査

解体調査における各試験区に大きな差はなかった。このことは、1区から4区の交配雄に白色プリマスロックの3系統を用いたものの、雄の系統間差少ないと推察された。

以上のことから、雄系統によって差が小さいことから系統の中でも唯一劣性白である13系統を交配することで、生産される交雑鶏の羽装が有色を呈することから他の系統との差別化が図れるため、13系統を新しい交雑鶏の雄鶏として活用したい。

(表3)

伊予路しゃもとの比較

当場の伊予路しゃもとの比較では、

飼育期間が短い(135 100日前後)

出荷体重が大きい(平均2.4 2.8kg)ことから、

飼育効率が高く、生産者の負担が小さい鶏となっている。

3) 食味アンケートを松山市内のホテル等で調理関係者に実施した結果、歯ごたえや食味について、概ね良好との結果を得た。

4 普及上の留意点

1) 適用範囲

今回の交雑鶏については、飼育効率が高く生産者負担が少ないことから、従来の畜産分野だけでなく、複合経営の一作目として、転作田や遊休農地への有効活用を、また強健性があることから果樹園等の下草の除草的役割を担わせる等の活用方策を検討している。

2) 留意点

転作田や遊休農地、果樹園等での活用については、土壌への影響を調査する必要があり、また果樹園の除草では、従来の除草労力や薬剤などの低減効果、鶏を取り入れた生産方式の可能性などを関係機関と協力して明らかにし、普及の可能性を調査したいと考えている。

